不定期刊行　　第533号　2015.02.05

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
大町高等学校

360度の展望　樹氷咲く富士見台高原1　（飯田高校 杉山昭久先生寄稿）

昨日は、みぞれまじりの雪。予報によれば本日２０日(火)、降水確率０%。小生といえば再任用ハーフタイムで本日休日。１年ぶりの富士見台に行って見ようと思い立った。きっと、あの場所、樹氷の世界が広がっているはずと思い、７：５０我が家を出発。９時少し前に，園原のゴンドラ乗り場に到着。ウイークデイということもあり、駐車場は５、６台の乗用車が止まっているだけ。日曜、休日ともなればここ、ヘブンスそのはらスキー場は、中央道園原インターから５分という立地条件もあり、愛知方面からのスキー利用者（特にフアミリー）で一杯になるのだが・・・・。スキー修学旅行の生徒が入るらしく、関係者が数人貸しスキーやらウエア―の準備をして待機している。横隣の車では、学生グループの男女数人が登山の準備をしている。

身なりを整え、リフト券を購入。見晴台までは、ゴンドラ券とリフトを乗り継ぐ。リフトが一本乗るだけで４００円。ゴンドラ券とあわせると２５００円以上かかる。リフト１日券がシニア料金で２３００円。ゴンドラ往復とリフト券を購入するより安い。リフト１日券を購入。この時ばかりは、６０歳を超えていることの喜び？を痛感。

ゴンドラとリフトを乗り継ぎ、見晴台下でスノーシューを装着し出発。萬岳荘までおよそ５ｋｍ。林道に入るともはやリフトの音はない。林道には、先行者のスキーのトレースが２本のびている。トレースの後を１０分ほど下ると、先行していた男女２人に追いつく。挨拶をしようとその顔を見ると、そこに見慣れた顔があった。アルススポーツの羽場さんの息子の勲君であった。羽場さん（お父さん）は昨年の１月に多くの方に惜しまれながら、病気でお亡くなりになり、今、店は奥さん１人で営まれている。かつて（４０年前)、アルスさんは、馬場町に間口１軒ほどの小さな山道具販売と靴修理のお店として営まれていた。羽場さんとは、自分が高校２年生の３月、仲間３人で１週間の伊勢湾一周の自転車旅行に出かけた時からの４０年来以上のお付き合い。この旅行で初めてラジュース（石油コンロ）を知った。旅行仲間の親友の１人が羽場さんの奥さんといとこという縁があり、コンロ持参で自転車旅行へ旅立った。

教員になり、山岳部顧問としての岡谷南高校時、山岳センター主催、５月の針ノ木の雪上研修会や、またインターハイ・国体競技でも大変お世話になった。何らかの形でお付き合いをし、山を通して何らかの形でお付き合いをさせて頂いた。大平をこよなく愛し、集団移住の後も、街並み保存と、いろり活用の重要性を訴え、行政の前向きでない姿勢に反対し、大平をいかに守り、保存していくかを自ら足を運び、訴え続け実行した人物である。亡くなるには、ちょっと早すぎた。

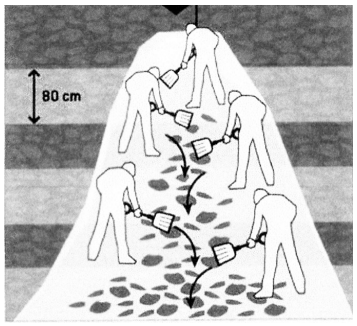
息子の勲君とはここ６年ほどのお付き合いである。羽場さんと高森中学校の集団登山（南アルプス前小河内・烏帽子岳）の手伝いをし始め、その後、羽場さんの後がまとし

て勲君と３回ほどご一緒した縁から。今は、山岳ガイドとして活躍。ガイド資格をとり、ヘブンスを中心に、スノーシュー体験をはじめ、県内外の多くの山の案内をしている。

林道上部の展望台まで２人と同行する。思い通り、周りの木々は樹氷の花が咲いている。同行者の若い女性は、自分が風越高校を去った後の山岳部のOGであり、３年間インターハイ全国大会のメンバーであったことが判明。熊伏山の県予選の時の当時３年生。２８歳。今はガイドの資格を取り、阿智村園原にある「ははき木館」で働いているとのこと。縁がまたありました。（以下　次号）

山岳総合センター　講師研修会で

今年の山岳センターの講師研修会はここ数年の流れを汲んで、初日はセンターとその周辺、２日目は鹿島槍スキー場上部にて行われた。今回は特に「効率のよいショベリング」にスポットをあてて行われた。提案されたのはV字コンベアベルトメソッドである。２日目に実際にその方法で掘り出しを実践した。埋没者の下方に逆V字型に適度な間隔を空けて連なり、まん中を掘り出した雪の排路として確保し、コンベアベルト状に雪を排出する。先頭の指示で、時計回りにローテーションをしながら、疲労を軽減しながら出来るだけ早く掘り出そうという方法だ。この方法自体は、通常チームで雪洞を作るときにも使っている方法であり、目新しいものではない。だが、実際の雪崩捜索の現場で最も時間のかかるのは、ショベリングなのである。今はビーコンを持つのは当たり前、しかも３本アンテナのビーコンが主流になり、場所の特定はそれほど時間をかけずにできる。しかし、問題はそのあとなのだ。仮に５分で場所を特定できても、掘り出しに２０分かかったのでは、元も子もない。デブリの硬く締まった雪の中から如何に早く掘り出すかが、生死を分けるといってもよい。捜索時もそうなのだが、パニックに陥っている中だからこそ、烏合の衆ではなくチームレスキューが求められる。改めてその重要性を感じた。



ところで、後立山の今年の雪だが、例年より積雪量は多かった。僕がこの研修会に出始めたのは、美須々ヶ丘高校にいたころだから、すでに２０年近く前のことだ。当初は１２月に栂池スキー場で行っていたが、その後１月下旬に大谷原での開催の時期を経て、ここ１０年ほどは鹿島槍スキー場上部黒沢尾根で継続的に行っている。毎年同じ時期に同じ場所で行うことで、経年的な雪の変化を感じることができて僕にとっては、大きな蓄積となっている。同時に、雪崩捜索については毎年やってもなお、新たな気づきがある。２０年前はビーコンは高嶺の花だった。しかも機種はセンターのアルペンビーコンを借りての研修という時代だった。この研修会でビーコンの有効性を感じて購入したビーコンもすでに１５年物、講師の東秀訓さんに言わせれば、いつ不具合がおき、サドンデス状態になってもおかしくない時代物とのことだ。それはそれとして、今はビーコンは冬山の標準装備。隔世の感がある。しかし、あくまで機械は機械に過ぎない。雪崩を教えてくれるわけではないし、持っているだけで助けてくれるわけでもない。やはり雪山に入るには雪を見る目、山を見る目、気象を見る目、様々な人間の知恵を磨かねばならない。